

2005年4月10日 復活節第3主日礼拝

「次の安息日にも」

(申命記5章12～15、使徒言行録13章42～52)

「パウロとバルナバが会堂を出るとき、人々は次の安息日にも同じことを話してくれるようにと頼んだ」。

パウロは、どの町に行っても、まずユダヤ人たちに福音を語りました。具体的には、ユダヤ人の集まる会堂に行って、イエス・キリストこそ、約束された救い主であると宣べ伝えたのです。その結果、二つの、全く異なる反応に出会うことになります。

一方では、パウロのたちの語る福音、イエス・キリストのことを聞いて、喜んで受け入れた人々がいました。この人々は、「次の安息日にも同じことを話してくれるようにと頼」みました。キリストのことをもっと知りたい。聖書に書かれていることをもっと知り、神様の恵みのもととどまって生きたいと願った人々でした。よく耕された土地に種がまかれれば、春の雨や日の光をあびて、やがて芽を出すように。イエス・キリストのことが語られると、その言葉は聴く人々の中に留まり、生きて働き始めるのです。やがて信じる心が、神の言葉を聞き続ける人々の内に芽生えて、キリストを信じ始めた人々。「よい土地に蒔かれた種」として歩み始めた人々がいました。

ところがその一方で、全く正反対の態度をとる人々もいました。約束どおりパウロたちが、次の安息日にもやって来て、イエス・キリストのことを話し始めました。すると、「ほとんど町中の人々が主の言葉を聞こうとして集まって」きました。ところがこれを見た「ユダヤ人はこの群衆を見てひどくねたみ、口汚くののしって、パウロの話すことに反対した」のです(45節)。まもなく、この人々は、「神をあがめる貴婦人たちや町のおもだった人々を扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、その地方から二人を追い出」すまでします(50節)。

このように、イエス・キリストのことが語られたときに、全く正反対の異なる反応が生まれます。この事実を、聖書は包み隠さず述べています。心から信じて、喜んでキリストのことを伝えていけば、どんな人でも必ず心を開いてくれる。そう思いたいのですが、現実にはそうとばかりはいきません。確かに聖書には、「求めよ、そうすれば与えられる。たたけ、そうすれば開けてもらえる」と書かれています。でも伝道とか人間関係では、常に相手があります。相手がいる限り、何から何までこちらの思うとおりに運ぶとは限りません。相手のためにどんなに祈っても、尽くしても、報いられないこともあるのです。イエス・キリストも、このようにおっしゃっています。「行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。・・・その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる。あなたがたを迎え入れもせず、あなたがたの言葉に耳を傾けようとしぬ者がいたら、その家や町を出て行くとき、足の埃を

払い落としなさい」(マタイ 10 章 5 ~ 14 より)。

パウロたちは、イエス・キリストの与える平和、救い、そして喜びをたずさえて、この町にやってきました。そしてキリストのことを知らせると、喜んで聞きに集まってくる人もたくさんいました。しかし大多数の人々は、ユダヤ人たちの悪巧みにそそのかされて、パウロたちから離れていきました。パウロたちから離れるだけでなく、彼らが宣べ伝えたキリストに背を向けて、パウロたちを町から追い出しさえしました。そのため二人は、主イエスがおっしゃった通りにするほかありませんでした。「二人は彼らに対して足の塵を払い落とし、イコニオンに行った」(51 節)。自分たちのしたことが受け入れてもらえず、町を追い出されてしまう。わたしたちなら、怒りに燃えて、捨てぜりふの一つも吐き捨ててしまうことでしょう。しかし、二人は違いました。町の人々をにらみつけるでもなく、力を落として、挫折や敗北感を抱えて町を去ったのでもありません。聖書には、こうあります。

「他方、弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた」(52 節)。

信仰に生きるすばらしさがここに 있습니다。こんな仕打ちをうけながら、弟子たちはなぜ、喜びと聖霊に満たされて旅を続けることができたのでしょうか。その秘密は、「ゆだねる」ことを知っていたからです。迫害が起こっても、二人はひるまず勇敢に語り続けました。その結果、一定の成果が与えられました。「異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉を賛美した。そして・・・信仰に入った。こうして、主の言葉はその地方全体に広まった」(48 ~ 49 節)。町の主だった人々、有力者の婦人たちからは反対され、結局パウロたちは町から追い出されてしまいます。でもキリストのために、町の人々の救いのためにしたことは、決して無駄ではなかったのです。一握りの異邦人たちがキリストを信じて、信仰に生きる人々がこの町にも残されました。

終わりよければすべてよし、という言葉があります。パウロのこの町での伝道が、はたしてそういえるかどうかはわかりません。ただ人の目にはどう映ろうとも、神様は確かに、この二人を通して働いてくださいました。この町でも、確かに救いのみ業はなされました。このことは、町から追い出された二人にとって、大きな慰めだったに違いありません。わたしたちも同じです。結果をあれこれ思いわずらうよりも、キリストから託された使命を精一杯果たすことが大切です。パウロにもバルナバも、わたしたちと同じ人間です。決して完全ではありません。神様ではありませんから、欠点や失敗もあったかもしれません。それでも精一杯、主のご委託に応えようとしてしました。イエス・キリストのことを、忠実に人々に伝えました。その結果、異邦人たちは救いに入れられました。このように、たとえどんな結果になろうとも、わたしたちの方でなすべきことを精一杯して、あとのことはすべて神様におまかせする。委ねる。それが大切です。そこから来る安らぎ、平安は、誰にも奪うことはできません。パウロもバルナバも、この信仰に生きていました。だからこそ彼らは、「喜びと聖霊に満たされて」、与えられた使命を果たすことができたのです。何とすばらしことでしょうか。このすばらしい道を、わたしたちは既に歩み始めています。これからも歩み続けることができます。イエス・キリストを信じて、神様にすべてをゆだねて

いくなら、わたしたちにも同じ祝福と幸いな道が備えられています。

パウロとバルナバが、これほど辛い仕打ちを受けたのに、なおも喜びに満たされていたのには、もう一つ秘密があります。それは、神様のお定めになったご計画は必ず実現する、と信じていたからです。(摂理信仰といいいます) 48 節にこうあります。「永遠の命を得るように定められている人々は皆、信仰に入った。」「永遠の命」、それはイエス・キリストを信じた人々に分け隔てなく与えられる命です。永遠の命、そして新しい人生です。この命を得ることができるようにと、神様はあらかじめわたしたちを選び、定めてくださいました。命の書に名前が書き記されている人々は幸いである。とあるのもこのことです。

では、誰がこの命に定められているのか？ 人にはそれはわかりません。当の本人にもわからないかもしれません。わたしたち人間には知ることが許されていないのです。ただ神様だけが、ご存じです。今日の聖書から言えることがあります。はじめ神様はユダヤの人々(イスラエル)を選んで、永遠の命に招いておられました。しかし、46 節「神の言葉は、まずあなたがた(ユダヤ人)に語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値いしない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。つまり神様は、キリストを十字架につけたユダヤ人たち、そして人類を救いに招いておられるのです。それほどに神は、わたしたち人類を愛してくださっています。ところが、この神の招きを受け入れず、ユダヤの人々は拒んでしまいました。そういうことも、わたしたちにはできてしまうのです。それは、神様を一番悲しませることです。なぜなら、「神はその独り子をお与えになったほどに世を愛された」からです。「御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るために」。でも、永遠の命を得るためには、御子イエス・キリストを信じなければならない。でなければ、どれほど神の愛を受け、招きかかれていても、すべては無になります。どれほどの恵みを約束されていても、キリストを拒んでしまえば、すべてが無駄になってしまうのです。たとえていえば、すてきな歌手が出るディナーショーの招待券をもらっているようなものです。出かけていけば特等席で、主演の歌手に握手してもらえるし、おいしいお料理もお腹一杯食べれる。終わった後は楽屋にも入れてもらえる。あの有名歌手のお友達になれる。でも、その日その場に行かなければ、みんな無駄です。いくらサイン入りの手紙をもらったとしても、そこに行かなければ、その人に会うことも握手してもらうこともできません。

ユダヤの人々は、イエス・キリストに出会えるとの招待状を、神様からもらっていました。それを後生大事に持っていました。そして遂にキリストは来ました。でも人々は、キリストのことを受け入れませんでした。それで神様は、前もって招待しておいた人々が来ないなら、次ぎに備えられている人々のところに行って、連れてきなさい。そうお命じになったのです。それが、異邦人たちのところに行く、ということでした。「見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。主はわたしたちにこう命じておられるからです。『わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、あなたが、地の果てにまでも救いをもたらすために。』」「異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉を賛美した。そして、永遠の命を得るように定め

られている人は皆、信仰に入った。」

このようにして、神様のご計画は実現しました。一方では、予定されていた人々の拒絶にあい、パウロたちの伝道は大変な困難に陥りますが。にもかかわらず、幾多の困難を越えて生きて働かれる神。神の全知全能の力によって、教会は生き生きと前進していきました。神様の生きた働きは、今もわたしたちの間で続いています。聖書に書かれていることは、必ずその通りになります。辛いこと、悲しいことも、起こってほしくないようなことも、聖書には書いてあります。それらは、聖書に書いてあるとおりに必ず起こります。信仰に励めば励むほど、迫害や困難や誘惑が襲ってきます。かつて神に仕えた者たちで、迫害されなかった預言者や信徒たちがいたでしょうか？ それらはすべて、そのとおりに起こります。聖書に預言されていることは、必ず実現するからです。ということは、だから聖書に約束されている救いも、必ず実現するのです。キリストを信じれば信じるほど、試練はやって来ます。聖書に書いてあるとおりに。しかし、迫害や試練が激しくなればなるほど、聖書に書いてあるとおりに、福音は前進します。そして「永遠の命を得るように」と、主に定められている人は皆かならず、救いへ、信仰へ入れられていきます。ここに希望があります。わたしたちの希望はただ、主なる神様にかかっています。救い主イエス・キリストが十字架にかかり、復活して成し遂げてくださった、わたしたちの救い。これが、わたしたちの希望です。キリストの下に留まり続けるなら、「喜びと聖霊」が、いつもわたしたちを捕らえて離しません。この神様を信じて、次の安息日にも、主イエス・キリストのもとに集いましょう。主の御言葉を賛美し、これからも神の恵みの下に生き続けましょう。

[説教者：堀地正弘牧師]